

# 近世尾張藩における史蹟の保存と顕彰

羽賀 祥二（名古屋大学 名誉教授）

## はじめに－本報告の課題

愛知県の尾張地域には小牧城跡、清洲城跡、桶狭間古戦場跡、長久手古戦場跡、その他著名な史蹟が存在する。こうした戦国時代から近世初頭にかけての著名な歴史的遺蹟は、現在公園化された場所も多く、園内にはいくつかの記念碑や銅像が建立されている。

尾張藩では17世紀末から古城・古戦場の調査が行われる一方、それと密接に関連した地誌の編纂もなされていった。こうした動きの中で、歴史的由緒がある場所が価値あるものであることを表示するための記念標柱・記念碑が建立され始めた。この歴史の顕彰の動きは、18世紀中期になって本格化し、価値を見出された場所に立ち、過去を回想し、記録することが領主やそこに生活する住民にとって必要な時代を迎えることになった。

こうした歴史的に由緒がある場所、すなわち史蹟への関心は近世中期から始まり、19世紀を通じて史蹟保存と顕彰の動向が本格的となった。史蹟が見出され、その後長い時間にたどってきたその履歴について、尾張地域の城跡の事例を取り上げて検討してみたい。

## 1. 名古屋市蓬左文庫所蔵の尾張国古城図

### (1) 古城図について

最初に尾張地域の古城跡を考える材料と

して、名古屋市蓬左文庫が所蔵する古城図を紹介したい<sup>1)</sup>。絵図名は『名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録』（1976年）による。

表1は「古城絵図」というタイトルが付けられた絵図で、いずれも寛文～延宝年間（17世紀後半）の作成だと推定され、幕府が命じた正保城絵図の作成の影響を受けているとされる。他方、表2は「古城之図」というタイトルの絵図の一覧である。これらの「古城之図」は18世紀初めに作成されたと推定されている。

蓬左文庫にはこの二つの系統の古城図が所蔵されているが、両者の古城図の違いについて丹羽郡小口

表1 尾張国「古城絵図」一覧

番号	図名
1	愛知郡鳴海村古城絵図
2	愛知郡岩崎村古城絵図
3	愛知郡末森村古城絵図
4	愛知郡杓掛村古城絵図
5	春日井郡上品野村古城絵図
6	春日井郡小牧村古城絵図
7	春日井郡清須村古城絵図
8	春日井郡小幡村古城絵図
9	丹羽郡小口村古城絵図
10	丹羽郡重吉村古城絵図
11	中島郡勝幡村古城絵図
12	葉栗郡黒田村古城絵図
13	知多郡大高村古城絵図
14	知多郡河和村古城絵図
15	知多郡宮山村古城跡之図
16	知多郡大草村古城絵図
17	知多郡緒川村古城絵図

表2 尾張国「古城之図」一覧

番号	図名
A	愛知郡星崎村古城之図
B	知多郡緒川村古城之図
C	知多郡常滑村古城之図
D	知多郡東端村古城之図
E	知多郡坂部村古城之図
F	知多郡宮山村古城之図
G	丹羽郡楽田村古城之図
H	丹羽郡小口村古城之図
I	春日井郡小牧村古城之図
J	春日井郡清須村古城之図

村古城跡を例に見てみたい。図1は「小口村古城絵図」(表1の9)、図2は「小口村古城之図」(表2のH)である。

図1には土居・堀・から堀・「やくら台」(櫓台)の表示、城郭内外の土地利用(芝・田畠)の様子を読み取ることができる。また北から城郭の東側を流れる「かうせ川」(合瀬川)・「おさな川」(幼川)の川筋が書き込まれている。また南にある小牧山と北の青塚古墳が表示され、その場所への距離、そして尾張徳川家の居所の名古屋と付家老成瀬氏の居城が



図1 「丹羽郡小口村古城絵図」(加筆)



図2 「丹羽郡小口村古城之図」(加筆)

ある犬山への里程が記された。

なお図1には、合瀬川に合流する木津用水(慶安3年(1650)竣工)が描かれていない。このためこの古城図はその竣工以後に作成されたものと理解されている。

図2は「土居」・「から堀」の文字、城郭内の東西南北の長さが書かれ、また小口村の百姓屋敷と藪地が描かれている。そして古城周辺の土地利用(田畠)や川筋が示された。

二つの系統の古城図を比較するために、もう一つの例として春日井郡清須城跡を取り上げてみたい。図3は「春日井郡清須村古城絵図」(表1の7)である。上(北)から湾曲して下(南)へ流れる川が清須川(五条川)で、青色で川筋が描かれている。

川筋に沿って太い黒の線は堤防である。また左上から南に延び、清須川に掛かる橋(五条橋)を経て、南に延びる道筋は名古屋と中山道の宿場の大垣(美濃国)とを結ぶ美濃街道である。清須川右岸に清洲古城の本丸があり、その三方を「水堀」が囲んでいる。絵図の中で、茶色の線は「土居」、黄色で描かれた太い線は「堀形田」もしくは「田」という書き入れがある。その他山王社、神明社などが示され、右下には枡形の入口が描かれている。また「畠」の文字が絵図の各所に記入されている。

他方、図4は「春日井郡清須古城之図」(表2のJ)である。城跡の東側を流れる五条川に沿って堤防があり、その西側に本丸跡が四重の土居が描かれ、本丸跡には「十三間程」という東西の間数、南の土居の箇所には「南北是より本城際迄壺町余り程」という文字の記入がある。北西の土居には「高サ六七間程」とあり、10メートルほどの高い土居が残存していたことがわかる。また美濃街道の宿場として「清須神明町」とあり、宿場の町並と街道の松並木が描かれている。そして宿場と城跡の間には薄い黒色で塗られた部分があり、「深沼」との書き入れがある<sup>2)</sup>。

比較した二つの地図は、城跡とその周辺の表現には大きな違いがあり、また城郭の様相やそれを取り

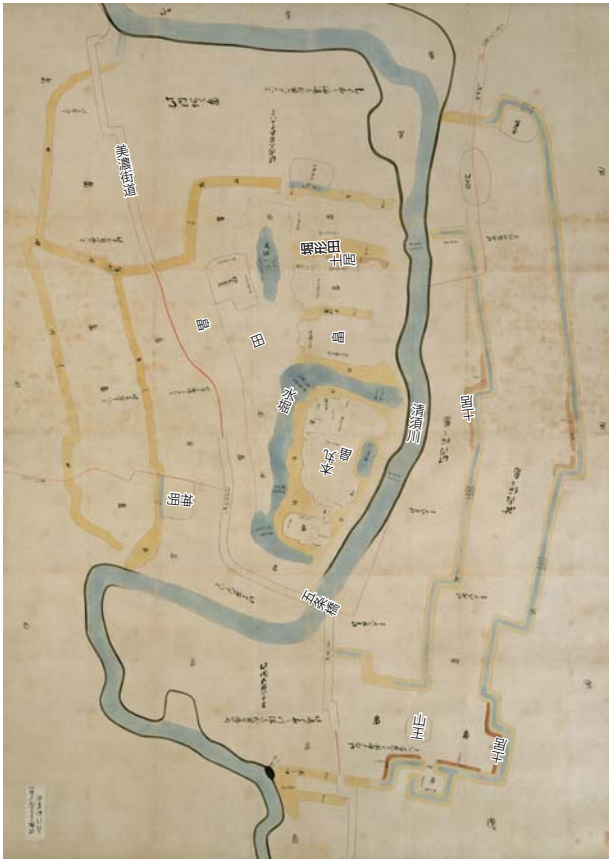


図3 「春日井郡清須村古城絵図」(加筆)

まく景観にもかなり変化が見られる。表現方法の違いはおそらく古城跡への視線の違いから生じていると考えられるが、作成主体が不明なので、さらに絵図の内容の検討が必要である。

## (2) 尾張藩の古城跡調査

尾張藩による古城跡調査とそれに基づく絵図の作成は17世紀後半に実施された。他方、長久手古戦場跡の調査は、寛文8年(1668)尾張藩2代藩主徳川光友が家老中山英龍に吟味を命じたことを嚆矢とするという。また3代藩主綱誠も元禄年間(17世紀末)に「尾張風土記」の編纂に着手し、古戦場調査を実施させた。これらの点については後に述べるが、合戦から1世紀程を経て、領内の古戦場跡への関心が高まり、その現状の確認と保存への動きが始まったと推測される。

編纂者と編纂年代は不詳であるが、尾張・美濃両国の尾張藩領内の古城跡を調査した記録が、『尾州濃州御領分古城記』(名古屋市蓬左文庫所蔵)であ



図4 「春日井郡清須古城之図」(加筆)

る。古城記は愛知郡稲葉地村の古城から始まり、郡毎に城跡を調査した記録である。それぞれの城跡に東西南北の間数や城主の変遷などを書き入れているが、概してその記述は簡単である。

例えば小口城については、次のように記載されている。

古城跡東西五十間  
南北五十八間四方二重堀、城所ハ村之内卯之方ニ有之、先年織田和泉守居城、其後備後守弟織田与次郎法名白岩  
天山殿城之北今ハ畑方ニ成ル

織田備後守は信長の父、信秀である。

「尾張風土記」の編纂担当者の一人であった天野信景の随筆『塩尻』巻之十八に、春日井郡守山村の城跡に言及した箇所がある。城跡の広さ、堀、城主を記した後、「凡そ本州古城記一冊あり、是に委しければ考ふへし」との追記がある。この「古城記」が『尾州濃州御領分古城記』を指していると断定する根拠はない。しかし、古城絵図の作成と時期を同



じくして、「古城記」の編纂もあったことは確かである。だが両者の関連は明らかではない。

表3は近世における古城調査記録、村落調査書、地誌に記載がある尾張国各郡における城跡数である。『尾張名所図会』は史蹟以外に寺社・人物・物産などの記述が多いことから、城跡を含めて古戦場等史蹟の記載は少ない。『尾州濃州御領分古城記』では147箇所であり、天野の『尾州古城志』はそれより30箇所程少なく、またその補訂本は158箇所です18世紀初頭に確認された城跡数であった。天保期の『尾張志』では最も多くの183箇所が記載されている。時代が下がるに従い、調査対象となった城跡数も増えていることがわかる。

## 2. 天野信景の『尾州古城志』と古跡観

### (1) 天野信景の『尾州古城志』

尾張藩による古城跡の調査が実施されたのとはほぼ同じ頃、尾張藩士の天野信景（寛文3年（1663）～享保18年（1733））が『尾張古城志』を編纂している。天野は歴史・宗教の考証学者として著名で、随筆『塩尻』の著者である。元禄11年（1698）「尾張風土記」の編纂を3代藩主徳川綱誠に命じられ、当時の藩を代表する学者、吉見幸和・真野時綱・福富親茂らと共に事業に当たるが、翌年綱誠が死去したため中断

することになった。その後、この事業は18世紀中期の松平君山による『張州府志』に継承されることになった<sup>3)</sup>。

天野は尾張藩領内の古城跡を藩や諸家の記録によって考証し『尾州古城志』を編纂した<sup>4)</sup>。蓬左文庫所蔵の『尾州古城志』の奥書には、「右城跡一百五十余所、依有司之簿、樓諸家籍記、以書之、其所失誤者後人幸正焉 宝永戊子七夕 藤信景志之」とある<sup>5)</sup>。「宝永戊子」は宝永5年（1708）である。なお天野は「尾張風土記」（『輿地志』という書名）編集の際、目録案を藩に提出しているが、それには「雑事志」の一項目として「古城」が「戦場」、「古蹟」、「宅墓」などに並んで配列されていた。

『尾州古城志』は、尾張国八郡内の古城跡（「城跡」、「城墟」）の名称、所在村名、遺構の東西南北の間数、城主の変遷を知りうる限り記述する。ただし、村名と城跡名の記述に止まるものが多い。

小口城跡については記載がなく、清須城跡については、「古中嶋郡今為春日井郡、城墟東西三十八間、南北百四間、三重堀、自駅東ノ方」との簡単な記述がある。他の城跡の記述も同じように、城墟の東西南北の長さ、所在村からの位置・方角、堀の状況（二重堀・三重堀）といった内容が記述されている。

### (2) 天野の古城観

天野はたびたび領内を巡覧し、その記録を随筆『塩

表3 尾張藩内の古城記・地誌に掲載の古城跡数

書名	編者	愛知	春日井	丹羽	葉栗	中島	海東	海西	知多	計
『尾張濃州御領分古城記』		50	30	12	2	18	11	2	22	147
『尾張古城跡』		42	29	12	2	21	7	2	28	143
『尾張古城志』	天野信景	39	25	9	2	16	6	2	20	119
『尾張古城志補遺』	長坂政賢訂補、 天野信景重	49	31	13	2	22	11	2	28	158
『寛文村々覚』		32	28	10	2	15	8	2	18	115
『尾張御行記』	樋口好古	47	34	8	—	13	10	2	18	132
『張州府志』	松平君山（秀雲）	62	32	10	3	21	11	2	30	171
『尾張志』	深田正韶撰、 岡部啓・中尾稲編	64	31	10	3	24	12	8	31	183
『尾張名所絵図会』	岡田啓・野口道直撰	14	6	6	0	5	2	1	4	38



尻』に書き残している。宝永4年(1707)5月11日、天野は清洲・国府宮(尾張一宮)を巡り、それを「惣社参詣記」にまとめた<sup>6)</sup>。この中で清洲城墟の様子について、次のように書いている。

同(慶長-引用者注)十五年神君列国の諸侯に命し、愛知郡名古屋庄に大城を築しめ、公官を移し給ひしより、廃城の旧墟と成けり、今天守の台及び大石二ツ三ツ残れり、我曾正定も当城に仕まつりし、其旧宅の跡は御園の辺なりと聞しはかりにて、いつくなりけんと思ふもなつかしき折節、子規(ホトトギスのこと-引用者注)音つれ侍ければ、荒まざる 草のはらなる ほとゝきす なくねはかりや むかしなるらん

天野は母の供をして名所を巡覧した。これ以前天野が「尾張風土記」の編集に従事した時にも、この地に来訪して尋問したこともあった。しかしその内容も忘れていたため、ここに「惣社参詣記」としてまとめたという。清洲城墟は天守台の巨石が残るのみであった。天野は祖先の正定の旧居を御園社付近で探したという。そして探索中にホトトギスの鳴き声を聞いた時、一首を作ったのである。

その後享保2年(1717)11月2日、天野は愛知郡末森村を遊覧し、末森城跡に登り、その感想を次のように書き残した<sup>7)</sup>。

城墟東西百間余、南北七、八十間二重堀、こゝは天文年中織田備後守信秀築て、同郡古渡の城より移り住せられし(その後信長弟の信行の居城、信行謀反のため廃城-引用者注)、末森は城主なくして廃燕せしとかや、今年丁酉に至りて凡そ一百六十一年、城地墟を残して昔かたりとなりぬ、古き井二、三ヶ所今猶存せり、嗚呼気焰星斗を摩しも、空しく荒草の霜をかさねて、見ぬ世のあわれとうつり行有さま、すへて青山白髪を恨を益に足れり、感ありて一絶を吟す

功名為昨槐安夢 瑟瑟山風不払悲

提劍拋鞍轉何在 只着老樹落紅飛

廃墟となった城跡の過去を回想し、気焰盛んであった時が移ろい、城墟をわずかに残すのみになった情景を見て、天野は心に憐愍の気持ちを抱いたという。「功名」は夢の中に消え去り、老樹に吹く山風を感じて、天野は161年という時間の流れ、星霜を感じたのである。

図5は「愛知郡末森村古城絵図」(表1の3)であるが、本丸・二ノ丸を取り囲んで空堀(黄色の部分)があり、所々に井戸の印も見える。城跡内には白山社が確認できるが、天野が巡覧した際に見たという寺院はこの絵図では描かれていない。

### (3) 城跡の軍事的価値

天野は古城跡の巡覧と考証を通じて、次のような史蹟観を抱くようになった<sup>8)</sup>。

城郭は其地を撰て之を築き、其勢の衆寡を計りて、溝壘の大小をなし、兵士の口を考へて、兵糧を蔵む、故に古城の広狭等しからず、夫故名有人の城墟、思ひの外に偏少なるあり、よく往昔の跡を弁ずべし、今都会の大城を以て見るべからず、嗚呼、今の人城墟古戦場に遊びて、徒



図5 「愛知郡末森村古城絵図」(加筆)

らに禾黍<sup>かしよ</sup>の感を生じ、寒煙の懷を賦して止る如きは詩人の意旨也、かりにも武林たる者は、此を尋ては今古の興廢の跡を見、強弱成敗の理を考へ、地利の好惡城營の堅危を理会すべし、凡そ国の丘塚、故城、及び山のつゝき、川の流れ、深林広地、其道路の案内を兼てよく知り置べき事、是も君に仕ふる一忠意也、されば諸州要害となるべき所は、山林、海浜、沼渚、丘陵の類ひ、古人意ありて其儘残し置侍るを、後世便利を事とする小吏などは何の弁へもなく、田に墾<sup>は</sup>き畠に墾りて一時の開治の利をのみはかれり、太平日久しく軍事なければ、かゝる壊倒武備のしわざをなす者、却て称せられ、自権を窃み威を張る事、東西同じ風俗とかや。我敬公(徳川義直—引用者注)軍書合鑑を御述作有て、是等の御心入間々仰せ残させ給ひし、誠公(綱誠—引用者注)の国志をおもほしたゝせまし—けるも豈御心なからんや

天野によれば城跡・古戦場跡は歴史の興廢を勘考する場所であり、単なる史蹟であつてはならなかつた。その史蹟を見て「禾黍の感を生じ、寒煙の懷を賦して止る」こと、すなわちその遺蹟が稲や黍が生えて荒れ果てた情景を見て、寒々とした思いを文章にする対象ではないことを、天野は強調した。天野は史蹟や要害の地、そしてそれを取りまく地理的状况を十分に調査しておくことは武家家臣としての義務であり、何の考慮もなく田畑として開墾してしまうことを強く戒めたのである。

### 3. 尾張藩の地誌編纂と古城跡

#### —松平君山の『張州府志』—

##### (1) 松平君山と『張州府志』

上述したように、天野らが命じられた「尾張風土記」の編纂事業は中断を余儀なくされ、この尾張藩の地誌編纂は18世紀中期になって松平君山の手引き継がれ、『張州府志』(宝暦2年(1752)自序)として完成することになった。

松平君山(秀雲、元禄10年(1697)～天明3年(1783))は尾張藩士で書物奉行などを勤め、和漢の古典や歴史、本草学などに通じた博覧強記の学者であつた。著書には『熱田志』・『岐阜志略』などの地誌、『士林泝洄』(尾張藩士の系譜集)、『本草正譌』などの本草書がある<sup>9)</sup>。18世紀後半尾張藩の学問を築きあげた注目すべき学者の一人である。

『張州府志』は中国地志に準拠して編纂されたもので、『大明一統志』に倣つて、「疆域」「建置沿革」「莊名」「郷名」「村里」「形勝」「文藻」「官舎」「第宅」「山川」「津梁」「財賦」「戸口」「賦税」「土産」「人物」「神祠」「寺觀」「陵墓」という項目に加えて、歴史的遺蹟に関する項目として「古城」「古戦場」「宅址」「古蹟」がある。それぞれの項目は尾張国の八郡毎に記述された。郡とは別に「府城志」「熱田志」「清洲志」「津島志」として、尾張国内で特別の由緒をもつ名古屋・熱田・清洲・津島が特別に立項され、記述されている。

この『張州府志』は序文で、次のような編纂の意図と成果を記した。

- ①中国の地志は『禹貢』に始まり、『大明一統志』と諸州府志に至り、あらゆる事柄を収集し、善美を極めることになった。
- ②「皇和」(天皇の治世)の時代には『風土記』があつたが、乱世で多くが失われ伝わっていないのは、惜しむべきことである。
- ③東照神君家康は天下を治め、藤原惺窩・林羅山を顧問として、文武の道が確立されたが、「輿地」の書は編纂されなかつた。しかし近年になり『南紀志略』、『常陸国誌』、『芸備録』、『肥後風土記』などが編纂されるようになった。
- ④尾張藩では地誌の編纂はなされず、残念だったが、今の八代宗勝公は「好学耽古、興滅繼絶」(学を好み古にふけり、滅びたるを興し絶えたるを嗣ぐ)の意志があつた。公は秀雲に府志の撰述を命じた。秀雲の門に学んだ千

村伯齋を総裁とし、門人たちが彼を助けた。

- ⑤君山らは博く群書を考証し、事蹟が明らかでない時には山川を跋涉し、親しく土俗に諳り、謬りを糺し、至当な説に至るまで考究を止めなかった。

- ⑥数年して成稿し、30巻が成り幕府にも献上した。この書を不朽に伝え、「国家一大典」として備えるべきである。

ここには君山が取り組んだ地誌編纂の意義とその方法がきわめて明快に示されている。

## (2)「清洲志」の記述

『張州府志』を構成する「清洲志」には、清洲城の建置沿革については詳しい記述があり、戦国時代から慶長年間までの戦乱の中での城郭の役割や城主の変遷を述べている。そして慶長14年(1609)11月徳川家康が手狭な城下や水害を避けるために町全体を名古屋の地に移転することを命じ(「清須越し」)、その結果「城地荒蕪」となったと記す。「清洲志」の記述で特徴的なのは、諸文献の考証によって、清洲城とその城主の変遷が年表化された形で理解されるようになった点にある。

文明9年(1477)尾張国守護斯波義廉が清洲城に移居して以降、斯波氏の居城となり、天文23年(1554)に斯波義統が守護代織田信友に殺害され、織田氏の拠点となった。弘治元年(1555)織田信長が信友を討って清洲城に入ったが、その後信長は小牧城に移り、清洲城は廃されることになった。そして永禄7年(1564)信長は稲葉山城に移り、信雄を清洲城に入れた。天正10年(1582)信長が暗殺され、清洲会盟が行われた。天正13年(1585)羽柴秀吉は、信雄と講和して、信雄は清洲在城を認められた。その後城主は豊臣秀次、福島正則、松平忠吉、徳川義直と続いた。

そして慶長14年に徳川家康は清洲城から名古屋城への移転を命じた。「清洲志」はその理由を、「是れ清洲、地卑しく、晋陽の厄があるを恐れるが故也」と述べた。「晋陽の厄」とは水害の恐れをさす。

「清洲志」はこの城地の沿革に続いて、「村名」、「坊巷」、「津梁」、「土産」、「人物」(守護斯波氏と織田一族、秀次・福島)、「神祠」(御園神明社・上島神明社・山王社)、「寺観」(総見院及びその遺址)、「宅址」などを取り上げ、文献によってそれぞれの由緒を記した。そして『張州府志 附図』には「清洲之図」を載せ、史蹟や寺社などを書き入れた。地図を見ながら清洲の地理と歴史(年表化された歴史)、諸施設の現状を理解させることを目指したのである。

ところで君山は「遊清洲駅記」という紀行文を残している<sup>10)</sup>。それには「町に出て五条橋に到った。右折すれば長い堤で、城の遺址に登った。岸から数丈あり、後は水田が数百代(代は令制以前の土地面積の単位、一代は約23m)広がっていた。実に要害の地であった。その辺には巨石が多く、これは古城の塁石であった」とある。

## (3) 尾張藩の史蹟調査と保存

以上述べたように、天野らが「尾張風土記」の編纂を試み、その後君山がその事業を受け継いで『張州府志』を完成させた。そうした地誌編纂事業に伴う古戦場跡・古城跡の調査の中で、尾張藩はその場所を表彰し、記念するために標柱や石碑の建立を行っていった。

その始まりは、寛文8年(1668)、2代藩主徳川光友が家老山脇英龍に長久手古戦場跡の調査を命じたことにある。中山は古戦場跡の仏ヶ根・桧ヶ根という山々に多くの松を植え、また代官古田弥五左衛門が古戦場略図を作製し、福富三郎右衛門(親茂)が戦死した森武蔵守・池田勝入・池田紀伊守の法名・姓氏を記した標柱を立てたという<sup>11)</sup>。

その後元禄12年(1699)、3代藩主綱誠は儒臣並河魯山、側同心頭後藤元方、同横井時庸、馬廻組福富に命じて「傍示」を古戦場に建てさせた。これは木製でいずれ石碑を建立する計画であったが、藩主死去により中断したという。さらに福富は、宝永3年(1706)4月、「御床机石」(徳川家康が座った色金山の遺蹟)と「首塚」(戦死者の首を埋葬したという塚)に記念標柱を建立し、さらに宝永6年4月



に色金山の麓の安昌寺に『長久手征伐記』（宝永6年正月）を奉納した。

現在、長久手古戦場跡には明和8年（1771）に建立された上記の3人の記念標柱が立っている。図6は池田勝入の標柱で、正面に「池田勝入信輝戦死場」、裏面に「明和八年辛卯十二月八日造 人見弥右衛門 赤林孫七郎」の文字が刻まれている。他の2人の武将についても同様の標柱がある<sup>12)</sup>。人見は尾張藩儒臣で勘定奉行も務めた藩士、赤林は当時小納戸役を勤めていた藩士であった。

また桶狭間古戦場跡にも人見と赤松が建立した記念標柱が現存している（図7）。正面に「士隊将冢」、左側面に「桶狭七石表之一」と刻まれている。長久手及び桶狭間の両古戦場跡に記念標柱が建立された背景はよく分からない。君山の『張州府志』の編纂直後に当たっており、宝暦～明和年間に尾張藩における史蹟調査と保存の成果を表す象徴であったことは間違いない。

さらに19世紀に入ると、桶狭間古戦場跡には新しい動きが現れた。文化13年（1816）この地に「桶狭弔古碑」と刻まれた記念碑が、今川家臣松井家の子孫で、領内の津島社神主氷室豊長の手によって建立された（図8）。文化6年（1809）尾張藩の儒臣、秦鼎（滄浪）が記念碑の撰文を書き、桶狭間の戦い

の経過とその意義、戦死した今川家の将士を悼む文章を石碑に刻んだ。秦は領内各地に建立された多くの記念碑の撰文を書いた人物であり、のち「樹碑」（碑を樹立する）の人と評されることになった<sup>13)</sup>。

秦が書いた撰文は、次のような内容であった。

高原にのぼって古跡をはるかに眺めつつ、古戦場に歴史の興廃をみた。風雨の中織田軍が敵中に攻撃を仕掛け、今川軍は混乱して2500人もの兵卒を失った。敗戦を聞いてもなお戦い、義元の屍を貫い受けて帰った今川家の将士もいることを評価する。彼らは「忠烈」の士として忘れられることはない。しかし義元死後の今川氏は「放蕩忘讐」して、結局は駿河・遠江の地を全うすることができなかった。戦いから250年の時を経た今、まるで昨日のごとく思い起される。この地に石碑を建て、戦死者を悲しむとともに、歴史の興廃の教訓を伝えなくてはならない。

17世紀末の遺蹟への木標の設置、18世紀中頃の記念標柱の建立から始まり、地誌編纂、記念碑建立などの一連の動きは、さらに遺蹟を社会的に表彰しようという流れを生みだすことになった。天保15年（1844）刊行された『尾張名所図会』巻5には、「桶



図6 池田勝入戦死場標柱



図7 「士隊将冢」



図8 「桶狭弔古碑」

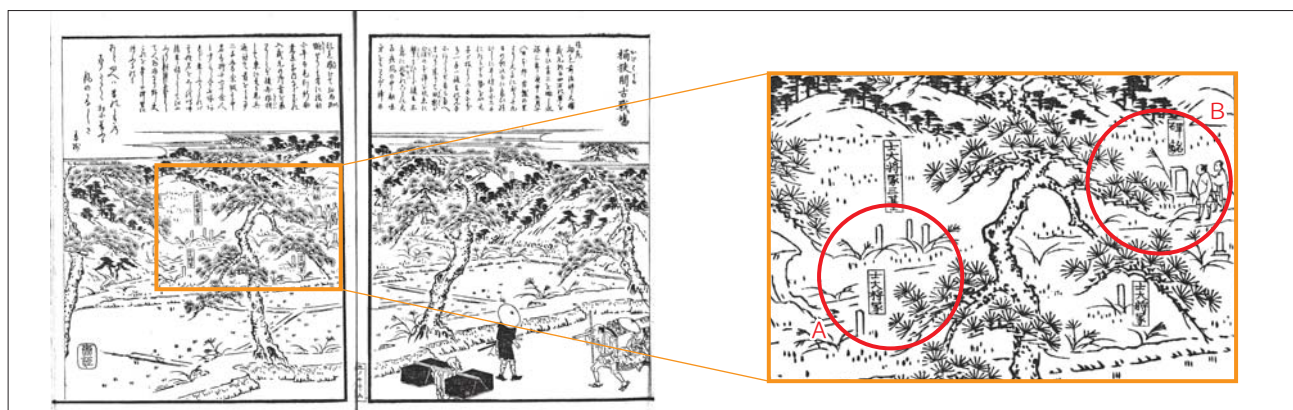


図9 「桶狭間古戦場」(『尾張名所図会』前編巻5)

「桶狭間古戦場」を描いた挿し絵が掲載された(図9)。

この挿し絵は史蹟が社会的にどのようにして認知され、周知されていくのかを考える上で、格好の材料である。図の手前は東海道で、そこを行き交う旅人がある。その奥の田地と松林の中にいくつかの石碑・石柱が描かれている(A)。中央の他より大きい石碑が「桶狭間古碑」であり、それを見入る旅人の姿も確認できる(B)。この名所図会を手にして史蹟に足を運ぶ人もいたであろうし、挿し絵を見ながら合戦の歴史を想像する人もいただろう。『尾張名所図会』には「桶狭間陣中に今川義元酒宴の図」、「尾張勢乱入の図」、「義元最期の図」と題した挿し絵も掲載されており、過去を回想する手立てとなっていた。

#### 4. 清洲城跡の履歴 - 幕末から近代へ

史蹟にはそれぞれがたどってきた歴史(履歴)が存在している。清洲城の場合にも創建から廃城、近世中期の城跡の現状調査と絵図化があり、それを踏まえた地誌の編纂と文献的考証による履歴の整理(年表化)があった。その最初は松平君山による『張州府志』の「清洲志」の記述であった。これは尾張藩の歴史における清洲(清須)<sup>14)</sup>の位置の再確認であり、年表化された形での履歴の整理であった。

他方、尾張藩士樋口好古が18世紀末から19世紀初めにかけて編集した村落調査書である『尾張徇行記』では、「清須新田」は556戸・2,446人でかなり戸口

数の減少が見られる。そして次のように記す。

此村ハ城府ノ址也、慶長年中城ヲ名古屋ニ遷シ玉フ後、其地ヲ開墾シテ村落トナレリ、サレハ寛文年ノ覚書ニハ清洲新田トアリ(中略)美濃路駅亭ヘ付テハ総名清洲宿ト称ス(中略)福島監物・左門・野村・大道寺ナト云字アリ、是ハ皆屋敷跡ナリ

その後19世紀に入ると、清洲城跡の歴史と現状は、最初の清洲郷土史である『清洲志』や『尾張名所図会』の編纂によって社会的にも広く知られるようになり、その歴史的価値が認知されるようになった。

##### (1) 清洲郷土史の誕生 - 武田載周『清洲志』

清洲の文人として著名な武田騏六の子として生まれた載周<sup>とさうか</sup>は文政9年(1826)頃、清洲の地理、遺蹟、寺社、清洲遊覧記(天野や君山などの紀行文)、歴代城主、斯波氏系譜、清洲に関係した人物等を網羅した郷土史『清洲志』を著した<sup>15)</sup>。その冒頭には「清洲城墟」の項目があり、『張州府志』や地誌などを参照しながら清洲城跡の歴史を考証した。わずかに残存している本丸跡の土塁と松を描いていることも印象的である。藩による領域全体の地誌(歴史地理書)とは違い、在野の文人が自らの生まれた郷土の歴史と現状をまとめたことは画期的な出来事であった。この郷土史の序文を同じく清洲出身で、後に藩士となった柳沢維賢が書いている。それには次のよ



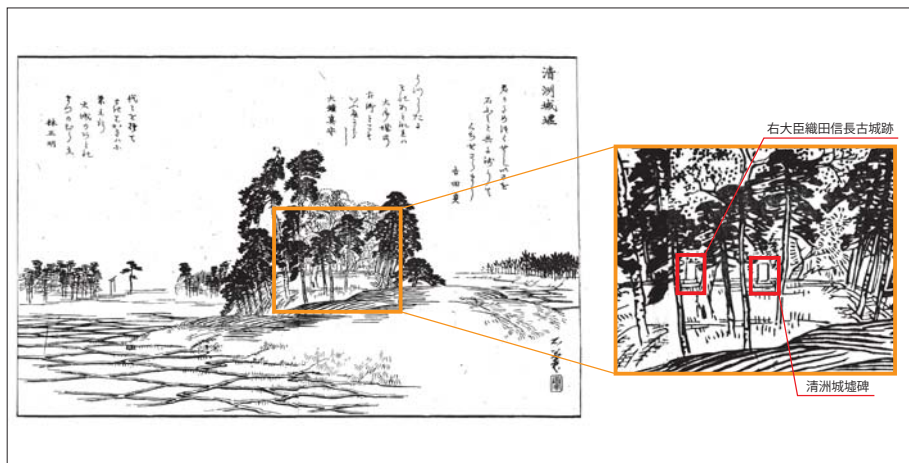


図10 「清洲城墟」(『尾張名所図会』後編巻3)



図11 清洲古城残瓦(出典左同)

うな文章がある。

慶長以来200年余の四海昇平の時代が続いたが、長い星霜を経る中で社会を取りまく様相は変遷し、旧跡や故事を知ることができなくなった。この事を恐れた松平君山は「張州府志」を撰述し、領内のあらゆる事蹟の究明を試み、詳細な記述を残した。しかし郷里ではない地については、漏れる事柄もあった。清洲は尾張国の旧府であるが、残念ながら過去の出来事を編纂した記録はない。この郷に生まれた者はその来歴を知るべきである。常に城墟に登り、堀を見て過去を想うことが必要である。清洲の旧跡を探し、故老に問い尋ね、古い記録をひもとき、斯波氏創業以来400年の沿革とその興亡に考えるべきである。

郷土の過去と現状を認識することの大事さを強調し、そのためには歴史の痕跡を留める遺蹟の探究は欠かせない作業となった。

武田は「清洲城墟」について、君山の『張州府志』を引用してその来歴を記述し、城跡については『尾張古城志』、『尾張名所記』、『尾陽雜記』、『尾張大根』、『張州人物志』といった地誌・人物誌を引用した。そして詳細な「清洲城地図」を附録として載せた。

## (2)『尾張名所図会』「清洲城墟」の記述

19世紀中期の天保年間に編纂された『尾張志』(深田正韶<sup>まさつぐ</sup>撰、植松茂岳校、中尾義稲・岡田啓輯)では「斯波武衛家居城跡」という項目で、簡単な城主を紹介するのみで、詳しくは『張州府志』「清洲志」を参照せよと指示した。一方、『尾張名所図会』(後編巻3、1880年刊)「古城跡」では、詳細な城主の変遷と「清須越し」の理由(五条川の水害の恐れ)を記述した。そして19世紀中頃の城跡の様子を次のように記述した。

清須五条川の西畔にありて、古松樹数株残り、三重堀のあとはつかに存せり、もとその境地甚だ広大なりしを、年々歳々田にすき畠に墾て、今の如くなれり、されば天守台をはじめ、諸門・殿宇・官舎・土居等の名、四方遠近の字に残れり、当城は慶長年中名古屋へ遷し給ひし古跡なれば、尋常の城跡とはたがひて、当所の林惣兵衛・櫛田源兵衛の二人へ城跡守りを命じ給へり

当時の清洲駅の繁栄した町並の様子は『尾張名所図会』に掲載された鳥瞰図(「清須総図」)にうかがうことができる。その中にわずかの樹木を残すのみとなった城跡が小さく描き込まれている。そしてそれを拡大した挿し絵が別に掲載された(図10)。本丸跡の周囲は開墾され、樹木に囲まれた城跡跡の中



央には二基の石碑を確認することができる。

この二基の石碑について『尾張名所図会』は、次のように建立のいきさつを記す。

当所の城址ハ歴然と遺りたれども、其由来をしるし、碑銘、及び城主の碑石等を建る事もなかりしを、近きころ当所の武田某志を起し、古城の遺石をもて右大臣織田信長古城跡と刻してこれを建、又同所の林某、伊勢の拙堂翁え銘をこひて、銘文の碑を造立せしより、旅人杖をとめてその旧蹤を賞讃せり、また碑銘及び古瓦の石摺ハ、林氏より出す

2つの記念碑は「右大臣織田信長古城跡」と「清洲城墟碑」である。前者を建立したのは武田農業(柯笛)という人物で、弘化年間の建立になるという。後者は林惣兵衛らが文久2年(1862)に建立した。

そしてこの挿し絵には吉田貞(尾張藩士で歌人)の「君がため／つくせしさを／石ぶみと／共に残りて／くちせざらまし」という和歌が添えられている。清洲城を支えた武将の功名が石碑と共に永遠に残されることを期待したのである。また記念碑の撰文と城跡から発掘された古瓦の図も『尾張名所図会』に掲載された(図11)。この古瓦の拓本は本陣林家が売り出していた。図11には8点程の拓本が描かれたが、これには「今もなほ／御城のかはらの／かはらねは／旧しおもかけ／見えてかなしも」という歌が添えられている。この歌は『尾張名所図会』に多

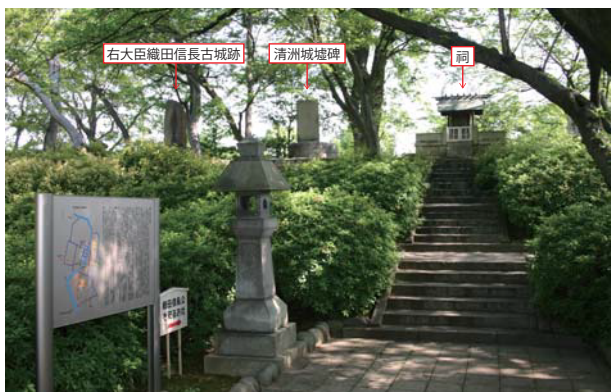


図12 清洲城跡の記念碑と祠(清洲公園)

くの挿し絵を寄せた尾張藩士小田切春江による。

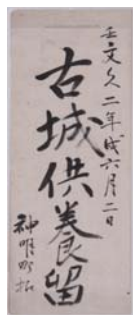
図12が現在の2つの記念碑である。左が「右大臣織田信長古城跡」、中央が「清洲城墟碑」である。

後者は津藩の儒臣斎藤拙堂に撰文を依頼し、それが表面に刻まれている。撰文の内容は、①群雄割拠の時代から天下一統を実現した織田信長の先駆的な業績、②清洲のもつ地理的な位置(天下統一の事業は人力とともに地勢が不可欠な要素だとする)、③清洲の歴史(斯波氏から徳川初期まで)、④慶長年間の名古屋への城郭移転と清洲の衰退を述べた上で、林が撰文を依頼した意図を次のように記している(原漢文)。

この墟荒蕪して、わずかに二松樹を存す、過ぎて問う者なし、馭長林某、意甚だ之を憾む、霸業開創の地たるを以て、まさにかくの如くならずと、謀りて碑を墟上に建て、以て昭かに世に示さんと欲す(略)余、おもえらく林氏の意、故を審かにし旧を存せんと欲す、亦闡幽の挙に属す

わずかに残された歴史の痕跡を社会的に表彰していく事業は、「古」(過ぎ去った昔の出来事)を詳しく明らかにし、「旧」(古い物)を保存していくことであった。「闡幽の挙」とは、『易経』『繫辞伝』にある「往を彰らかにして来を察し、而して微を顕らかにして幽を闡らかにす」という文言に基づく言葉である。現在では「微」となり、「幽」となった過去の出来事を明らかにして未来に備えることが清洲城跡の保存事業だと、斎藤は評価したのである。

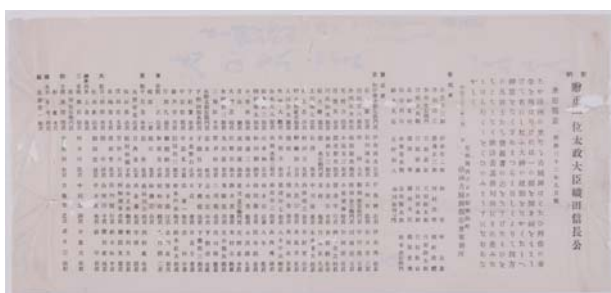
『尾張名所図会』は清洲の過去と現状を文章だけでなく、「清須須賀口古覧」、「織田備後守犬追物を見る図」、「清須駅高札場」、「琉球人清須駅本陣に憩ふ図」、「清須花火」と題した挿し絵でも表現していた。こうしたいくつかの挿し絵を添えることによって、読者に清洲の歴史を回想させようとしたのである。



文久2年留帳  
(個人蔵)



本社側面二十五分一図  
(竹田家文書 名古屋大学附属図書館所蔵)



明治32年 和歌奉納関係者一覧  
(竹田家文書 名古屋大学附属図書館所蔵)  
図13 信長の祭祀・顕彰にかかわる資料

### (3) 清洲における織田信長の祭祀と顕彰

図12には二基の記念碑の他、もう一つの施設が見られる。右の祠である。これは信長を祀った祠で幕末に始まった信長供養行事に関連すると推測される。安政初年、竹田<sup>ときまさ</sup>辰正が清洲古城で信長公祭を執行し、さらに城墟碑が建立された文久2年(1862)には、6月2日に「古城供養」が執行された。図13の左上はその際に神明町が作成した留帳(寄附金の帳簿)である。

明治中期になると、清洲の町祭りとなり、旧暦6月2日(1912年からは陽暦6月2日)を祭日とした(林良泰『清須見聴誌』)。さらに明治32年(1899)頃には、清洲古城跡保存会が本丸跡に信長社を建立する計画を立て、寄附が呼び掛けられた。図13の右上が「本社側面二十五分一図」である。さらに明治32年2月には古城跡保存会により信長へ和歌が奉納され、この行事には多くの発起人・賛助員が名を連ねていた(図13の下)。また図12の手前には、「明治三十八年一月」と刻んだ灯籠がある。またこの灯籠の近くは、「明治四十年四月 燈明講中」と刻む手



図14 織田信長銅像(昭和11年制作)

水鉢も現存している。明治30年代から40年代にかけて、清洲古城跡保存会の活動が活発化するが、この灯籠奉納もその一環であったと考えられる。

20世紀に入ると、大正7年(1918)信長への正一位贈位にともない、信長の偉大な功績を称える清洲公園の開設が計画され、愛知県の補助費を得て大正9年(1920)3月工事が着手され、10月に竣工、翌年2月11日に開園式典が挙行された。さらに信長の事蹟顕彰は昭和11年(1936)2月11日の織田信長銅像(杉浦藤太郎制作、図14)の除幕式へと広がっていった。そして昭和19年(1944)6月には「信長公祠」が新たに建立されたのである(図12)。

### 結びに - 歴史的過去への回帰と再構成

歴史的遺蹟にはその史蹟空間を満たすさまざまな要素で満たされている。例えばそこが古戦場跡であれば、合戦をめぐるさまざまな伝承が「里人」によって伝承されてきた。戦死者の血が「陰火」として出現する話、合戦の忌日には血の池が出現するという話は、桶狭間や長久手の古戦場には伝えられていた。

また史蹟空間には戦死者を埋葬した首塚や墓石が



所在し、慰霊のための民俗行事（例えば設楽原古戦場の信玄塚における「火踊り」）が現在に至るまで続けられている。史蹟からはさまざまな遺品・遺物が発掘され、展示・紹介されるようになった。他方、建立された記念碑の前では歴史的功績を挙げた武将や歴史的功労者への顕彰行事がなされるようになった。それは近代に入ると地域社会の歴史祭典（300年祭、350年祭、400年祭）という定期的で大掛かりな祭典が組織されていった。

史蹟の考証と保存、そして社会的表彰、それらを通じた歴史的過去の再構成は、日本社会のさまざまな協同体において、18世紀から現在まで長い間継続されてきた作業である。その目的の一つは、協同体の創業者・功労者の事績の顕彰によって、現在を生み出した歴史的原点へ自らを回帰させ、創業にまつわる生命力を追体験することであった。顕彰のためには歴史的過去の事蹟の発掘と考証が必要であり、それらの記録化（地誌や郷土史の編纂）を通じて過去から現在に至る歴史過程は再構成されることになった。また歴史的出来事や功労者を広く社会に表彰するために、記念碑や記念標柱が広範に建立され、さらには祠や神社が創建されることになった。それら施設の建立によって過去の出来事・人物の功績はたえず回顧され、記憶として残されるようになった。そうした史蹟は公権力によって認知されることが始まり、史蹟保護の動きが定着して、史蹟を通じた日本人としての歴史的感情や感覚が共有化されたのである。そして20世に入ると国家による法制も整備されていった。

史蹟はそれぞれ固有の履歴を有してきた。ある時に、ある場所で多くの出来事が起き、時代の流れの中で変遷をくり返し、現在の歴史の場所が存在する。その歴史の経過において、いろいろな立場の者がそれぞれの考え方に従って、過去の出来事を考証し、「史実」を明らかにすると共に、さらに歴史の場所に手を加えていった。歴史の場所で、過去（そして現在に至る歴史）をどのように考え、想像するのか。その歴史像もまた時代によって変遷することは確か

であろう。史蹟の中で培われた歴史像の履歴もまた検討しなければならない課題であろう。

## 【註】

- 1) 蓬左文庫所蔵の古城絵図の分類と概要、作成年代、絵図と地籍図の対照による城郭復元などについては、遠藤才文・川井啓介・鈴木正貴「尾張国古城絵図考」（愛知県教育委員会編・発行『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ（尾張地区）』1991年）がもっともすぐれた成果である。
- 2) 17世紀中期の尾張藩領内の村明細調査書『寛文村々覚書』によれば、「清洲新田」は村高2,858石余、軒数702、人口3,767、8カ寺、18社の村であった。こうした村勢を示すデータ以外に、『寛文村々覚書』には史蹟に関する記述も見られる。「清洲新田」には「古城跡」として、東西38間・南北104間の城跡の規模に加えて、「先年織田大和守先祖より之城、其後信長公・尾張内府信雄卿・秀次・福左衛門大輔正則・薩摩守忠吉卿、御居城也、今は田畑に成ル」との記述がある。織田大和守は信友で尾張下四郡の守護代であった。その後の城主の名を記した後、城は田畑化したとする。『寛文村々覚書』上（名古屋叢書続編第一巻、名古屋市教育委員会、1964年）313頁。
- 3) 『名古屋市史』人物編第二、名古屋市、1934年、87-89頁。
- 4) 『尾州古城志』は蓬左文庫所蔵本の他、愛知県図書館所蔵本、名古屋市立鶴舞中央図書館所蔵の『尾張古城記補遺』と題する異本（名古屋市史資料13-36）があり、これには長坂政賢訂補の『尾州古城志』が収載されている。
- 5) この天野の書の奥書には、享保19年（1734）4月2日真燕という人物が写し、さらに天保6年（1835）9月2日奥村得義が「土井氏蔵書」からこれを写したとある。奥村は文政年間から幕末にかけて名古屋城の研究を行い、『金城温故録』を完成させた尾張藩士である。
- 6) 『塩尻』巻21、日本随筆大成第3期13、吉川弘文館、1977年、431-440頁。
- 7) 『塩尻』巻之66、日本随筆大成第3期15、吉川弘文館、1977年、334-335頁。
- 8) 『塩尻』巻94、日本随筆大成第3期16、吉川弘文館、1977年、413頁。
- 9) 前掲『名古屋市史』人物編第二、223-226頁。
- 10) 『弊帚集』余編（天明3年）所収。のち武田載周『清洲志』に収録された。
- 11) 蛙面坊茶町（鈴木作助）編『蓬州旧勝録』巻9、愛



知県図書館所蔵。

- 12) この記念標石を最初に記録したのは、『蓬州旧勝録』巻9である。
- 13) 『名古屋市史』人物編第二、川瀬書店、1934年、243頁。
- 14) 「清洲」と「清須」の表記は近世以来の文献で両方使われてきた。所領統治上の村名は「清須」であるが、地誌では「清洲」が一般的である。しかし『尾張名所図会』では地名としては「清須」、城跡には「清洲」が使われ、混在している。本稿では「清洲」を使用する。
- 15) 武田載周『清洲志』名古屋市立鶴舞中央図書館所蔵。

#### 【参考文献】

- 1 狩野真一『君山松平秀雲略伝』むかしの会、1934年
- 2 遠藤才文・川井啓介・鈴木正貴「尾張国古城絵図考」『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ（尾張地区）』愛知県教育委員会、1991年
- 3 高田徹「資料紹介・尾州濃州御領分古城記」『愛城研』第3号、1996年
- 4 高田徹「尾張古城志について」『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ（知多地区）』愛知県教育委員会、1998年
- 5 高田徹・岡村弘子「蓬左文庫蔵古城絵図に関する検討（その1）」『城館史料学』第6号、2008年
- 6 羽賀祥二『史蹟論－19世紀日本の地域社会と歴史意識－』名古屋大学出版会、1998年
- 7 羽賀祥二「近代都市の形成と城郭」『市史研究ふくおか』第10号、2015年
- 8 羽賀祥二「近世城郭と神社・記念碑」『近世城郭の近現代』国立文化財機構奈良文化財研究所、2017年
- 9 名古屋市博物館企画展『城からのぞむ 尾張の戦国時代』名古屋市博物館、2007年
- 10 展示図録『尾張の古都・清洲と濃尾地域－名古屋開府400年記念－』名古屋大学附属図書館、2010年
- 11 石川寛「愛知県公園小史－小牧・岡崎・稲置・浪越公園の成立から廃止まで－」『愛知県史研究』第20号、2016年
- 12 石川寛「史跡公園の成立と『三英傑』」『愛知県史研究』第24号、2020年

#### 【図版出典】

- 図1～5 名古屋市蓬左文庫所蔵、テキストを加筆。  
図6～8、12、14 著者撮影  
図9 『尾張名所図会』前編 巻5 1844  
図10～11 『尾張名所図会』後編 巻3 1880  
図13 参考文献10掲載図を転載。